特65
417

壯合風子著

萬病
素人 **療治の心得** 全

明治十八年七月刊行

特65
417

壯合風子著

萬病
素人 療治の心得 全

明治十八年七月刊行

素人病療治の心得

緒言

岐阜縣　壯合風子著

此の書を編述するの本旨い僻境村落の人不幸にして疾病に罹るの時醫を迎へんとするも路程遠隔にして容易に其の意を果す能いす空しく手を束ねて坐視し遂に不治の重症に陥るか如き歎あからしめんの爲にして暫らく醫師の來る間た藥

舗に就き之を求て服用し些か其の苦惨の症狀を輕減しのち醫に適應の療法を乞ひ終に其の病根を撲滅するあらバ幸ひ甚しとす

夫れ活物体に發顯る處の病い藥品を以て之を療治せざんハあるべからす將た其の病の起らさる前に之を防禦或い其の疾病の發すべき元因を挫折撲滅し又い已に起る處の病を療治するに藥物あるべからす唯其の運用の如何にありて的中

それハ克く其の効を奏すること疑ひなし然と雖とも藥物中假令少量を用るも健康を害し或い又救ふべからざるの危險を招き遂に非命の死を遂くるの不幸に陥るごときもの即ち毒藥あるか故に最も潛心注意し且つ醫家の指圖にあらされは決してかくの如き毒藥を用もへからす

用法に三つの要点あり、即ち左の如し

適症

禁忌

分量

爾他取除あり假令ば小人の甘汞に堪ゆる如く即ち大人にい中毒するの分量を小兒に投與そるも尚依然たり惡れ小人い体の中に入るも猛汞と云ふ藥に變性すること難きを以て吸收せられざるのとあらす小人い大人より腸管短狹あるか故に排泄すること速あれいあり

亦婦人月經の時い何藥を用ゆるも殊に子宮に充血を起すものあれい平日用ゆる目方よりい必ず減少して用ゆべし若し誤て多量を與ふれい速に危險の症狀を發し死を招くことあり宜しく注意そべし

藥の用量い各藥に從ふて差異ありと雖とも男女の區別年齢れ長幼体格の差異等に依りて等しらす就中年令にい尤も關係多しとす故に年令に

い注意すへし茲にフーエランドと云ふ先生の概定したる藥量增減法を記載それい宜しく此の法に從ふて用ゆへし然る時い蓋し大ある過なかるべし

半月より　一月迄　半分より　一分迄
一月より　六月迄　一分より　六分迄
六月より十二月迄　六分より　十分迄
一才より　四才迄　十分より十八分迄
四才より　五才迄　十八分より廿五分迄
十才より　廿才迄　廿五分より卅五分迄
廿才より五十才迄　卅五分より四十分迄
五十才より七十才迄　四十分より三十分迄
七十才より八十才迄　三十分より廿五分迄

灸瘡　二十四丁
眠瘡　二十五丁
痢病　二十五丁
胎毒　二十六丁
蒼腫毒　二十六丁
淋病或ハ楊梅瘡　二十七丁
疥瘡　二十八丁
胃弱　二十八丁

産前産後眩暈　三十丁
瘤子　三十丁
肉刺　三十一丁
脾胃虚弱或ハ腹痛　三十一丁
健忘　三十二丁
子宮痙攣　三十三丁
吐乳　三十三丁
胃中汚物停滞　三十四丁

悪眠　十
顔面蒼白身体倦怠　三十五丁
癜風　三十五丁
痰咳　三十六丁
黒癜　三十七丁
疾眼或ハ眼炎衝　三十八丁
吐瀉　三十九丁
口中赤爛或ハ齒痛　三十九丁
大人小人蛔虫症　四十丁
疥癬　四十二丁
腫物を釀膿しむる法　四十三丁
煩悶　四十四丁
瘡瘡　四十五丁
疫癖　四十六丁
寒胃　四十六丁
癇症氣鬱　四十八丁

腹鳴　四十九丁
腹痛　五十丁
皸裂　五十三丁
吃逆　五十四丁
虫齒　五十四丁
酸敗　五十五丁
血　五十六丁
油耳　五十七丁
呼嗅　五十七丁
瘡子　五十八丁
面皰　五十九丁
眩暈　六十丁
狐嗅　六十丁
頭痛　六十一丁
齒痛　六十三丁
腸加答兒　六十四丁

腸胃加答兒　はきくだし　六十五丁
脚氣　六十五丁
具物嚥下　一文銅錢と飯下せし如きもの　六十七丁
消化不良　ひるのそんじ　六十八丁
腎炎　六十八丁
助膜炎　むねいたみ　六十九丁
關節僂麻質私　ふしぶしのいたみ　七十丁
筋肉僂麻質私　そじょくのいたむやまる　七十一丁
外痔孩　いぼぢ　七十二丁
癩瘋　七十三丁
貧血症　ちのそくあきやまる　七十四丁
痔　七十五丁
急性氣管枝加答兒　がいき　七十五丁
慢性氣管枝加答兒　七十六丁
便秘症　七十七丁
腹膜炎　とげしきそちいたみ　七十七丁

十六

腦水腫　とげしきうよう　七十八丁
白帶下　七十八丁
逆上　七十九丁
條虫　八十丁
併私的里　八十一丁
全身脂肪腫　こへふとるやまゐ　八十二丁
神經病　さのやまゐ　八十二丁
喘息　八十三丁
中風　八十三丁
心季兀進　ぞうれ　八十四丁
咯血　八十四丁
麻疹　八十五丁
經血過多　八十五丁
脚神至痛　八十六丁
經閉症　八十六丁
舌咬傷　八十六丁
八十七丁

加答兒性黄疸　八十七丁
加答兒性肺炎　八十八丁
上肢筋痿麻痺私　八十九丁
神經性胃加答兒　八十九丁
腦充血咽頭加答兒　九十丁
肺勞　ろうがい　九十丁
經血過多子宮内膜炎　九十一丁
精神疲勞　九十二丁

十八

下腹　九十二丁
蜂螫瘡　九十三丁
火傷　九十四丁
簽刺　九十四丁
魚の目　九十五丁
斑雀を去る法　九十五丁
霜燒　九十五丁
痂痛　九十六丁

十九

小便閉　二十
瘧　九十六丁
血止藥　九十七丁
第一第二期火傷　九十八丁
打撲　九十八丁
癩病　九十九丁
頑癬　九十九丁
毒虫　蜂蜜峰の類　百　丁
百一丁
魚毒　海老蟹河豚貝鯨の類　百二丁
菌毒　松蕈香蕈の類　百三丁
阿片　並ニモルヒネ類の中毒　百三丁
水銀毒　朱白降汞升汞赤降汞
水銀蒸氣甘汞の類　百四丁
銅毒　緑青丹礬銅器に貯へたる
食物の類　百五丁
砒石中毒　殺鼠劑殺蠅紙白砒石
鶏冠石アヨリン色素類　百六丁

燐毒　百六丁
礦酸毒　硫酸硝酸鹽酸　百七丁
瓦私毒　炭酸硫化水素石炭コロール瓦私の類　百七丁
酒毒　燒酎葡萄酒酒類コロゝホルムの類　百八丁
萬病素人療治の心得目次終

萬病素人療治の心得

各法

○痤瘡

竜脳に葛粉を和し塗附るときわ良効を奏するものあり

亞鉛花蠟わ密陀僧を水に和し塗附るときわ亦妙あり

重炭酸曹達を里私林に混せ局處に用ゆるも効あ

り

炭酸マグネシヤを振り掛るも治そること妙あり

ともそ

石灰水にて洗條するも亦奇妙あり

○炎瘡

鉛糖水にて洗條そるとゝわ治そること奇妙あり

とす

石灰水にて洗ふときわ速効あり

○眠瘡

明礬又わ鉛糖水にて再三再四洗條それは治する

もの、あり

若驗にて克く洗條し鉛霜を塗るも効あり

○痢病

サアレツプ煎五十三匁單舍利別四匁

右を一日三度二日に分ち用ゐへし

芍藥八分當歸四分五厘黄芩五分黄蓮二分桂枝

二分大黄一分甘草二分木香一分槟榔子二分以上
丸味を調合一貼とあし水二合五勺を以て二分に
煎し一日に六八二貼小兒一貼宛服ス

○胎毒

大黄五厘紅花三分五厘槟榔子二分甘草三分
右四品を調合一貼とあし沸湯五勺に振出し一日
に用ゆ

○蓄膿毒

防風　荆芥　羌活　獨活　柴胡　前胡　薄荷
連翹　桔梗　枳殼　川芎　金銀花　甘艸
右何れも目方一分ッヽ
以上十三味を調合一貼とあし水三合を以て二合
五勺に煎し一日に二貼ッヽ用ゆ

○淋病或ハ楊梅瘡

川芎　木通　忍冬　山皈來　茯苓各五分ッヽ大黄三
分

右六品を調合一貼とおし氷二合五勺を入れ二合に煎し一日に二貼を用ゆ

○疥癬

大黄エキスをアルコールに溶き筆にて局所へ塗るとき小其の効尤も著るし

里私林にて潤をおし丹寧酸を振り掛るとき小乾燥して自ら平癒す

○胃弱

カルゝス泉四匁程を毎朝腹用そへし

ペプシヲを氷に溶かし里私林を入れ是れに釋鹽酸少許を加へ食後一時間程を經し后に用ゆるときわ奇妙あり

三飯の后に鹽酸リモナーデ四匁程を用ゆるも亦妙法あり

ゲンチアナ丁幾及ひ橙皮丁幾各五分を氷廿四匁に混合し服そるも妙あり

殊に胃弱にして平生不消化物を食すべからず

○産前産後眩暈

遠志　茯苓　黄蓍　香附子　各二分　人參　桔梗

各一分　山藥　木香　各六厘　甘草五厘

以上九味を細末に調合一貼とし一日に一貼を白湯にて三回に用ゆ

○癤子

皮膚紅潮して疹痛たへ難きときはヒョヌ琶布を貼付痛みを鎮め傍ら化膿を増進せしむるを奇妙ありとす

杉脂と胡椒等分を混合し貼付するも妙あり

○肉刺

白屈菜の絞汁を局處に塗るべし

木灰と石灰とを混合し糊に加へて局處に塗るも良とす

○脾胃虚弱或は腹痛

重炭酸曹達五分コロンボ末二分甘草末二分

以上三味を糊丸とおし一日に二回水を以て分服

べし

○健忘

大酒及び房事を僅しみ身体を清淨におし可及的

稗史絃聲を遠さけ養生を專一とおそへし

竜腦一分砂糖一分を混和し散藥とおして一度に

用ゆべし

○子宮經攣すべし

阿魏一分芎藭八分

以上二味を細末とおし調合糊丸とおし一貼とお

して一日に一貼を二回に白湯にて用ゆ

○吐乳

母親酒をのむへからゝそれ酒の乳中に移行て益〻

小兒を害するを以てなり

之を患むる小兒にい時刻を定めて乳を與へるへ

し若し叫泣してやまざるも與へざるを良とす

苦味丁幾五分單舍利別八匁生乳廿四匁を和し分服せしむへし

生乳三匁に大黄舍利別八匁を加しこれを六度に分服せしむれい大効あり

○胃中汚物停滯

黄苔五分黄蓮五分大黄三分

以上三種を調合細末とおして糊丸として一貼に作り一日一貼を白湯を以て用ゆ

○惡眠

臭素加里一匁を水二十四匁に溶き就床前に四匁ついを用ゆ併し劇藥なれと注意を加ふへし

モルヒチ六分ナレエレを就床前に頓服すれと忽ち眠氣を催ふと雖とも大毒藥なれと醫の指圖に非れと用ゆへからそ

○顔面著白身体怠

陳皮　白述　當歸各百目　黄蘗百五十目　人參三十目　柴胡五十目　桃瘧　甘草各二十目

右八品を調合細末とおし目方三匁を以て一包とおし一日に白湯を以て用ゆ

○癜風

焦性沒食子酸一匁を里私林八匁に溶し患部へ塗擦ときわ速効あり

安息香酸又い水揚酸を里私林に溶し塗り附るも

効あり

硼砂或ハ明礬を粉とし單膏に和し局處に塗るも

良ときと

○痰咳

甜香二分五厘を煎熹て用ゆるときわ妙あり

磁砂一分に砂糖五分を和し氷にて喫下も大効あ

りとす

乾姜　陳皮　桔梗　良姜各百目　甘草五十目

右を細末とし之を混和て蜂蜜を以て煉り目方六匁を一貝とし大八一貝小八半貝を一日三度に分服すへし

○黒瘢

蛭にて血を吸せ其の跡に絆瘡膏を貼るときい妙なり

蜀葵根を煎劑として用ゆるも効あり

アルニカ葉を切布に包み熱湯を注き患部を蒸す

べし

○疾眼或い眼炎衝たゝれめ

黄蓮　山梔子　防風　荆芥　薄荷　黄柏各三分

紅花二分枯礬五厘

以上八味調合一貼となし氷三合五勺を入れ二合に煎し放冷して眼を洗ふへし

○吐瀉

身体虚脱そるときい麝香二厘位を砂糖に交せ氷

にて用ゆへし

○口中赤爛或い齒痛

風化芒硝五分硼砂二分辰砂一分龍腦二分

右を細末とおし調合して十包に分ち一日一包を患部に塗るへし

○食滯

三飯共に食を減少し酒類又い茶の如きもの或は海老の如き凡て不消化物を食をべからす

芒硝二十四匁重炭酸曹達一匁八分食鹽七分

右を研和して四匁乃至五匁と熱湯にて喫下ときわ大効あり

橙皮舍利別一匁に硫酸マグネヤの五匁を混ぜ二合程の冷水を加へ克く振盪して服用すれば至極妙あり

滿那五匁に大黄末五分を加へ之に適宜の水を和して煉合せ少量の酒に溶し用れと亦効あり

○大人小兒蛔虫症

サントニーヲ三厘

右一味を一貼とし一日の用量大人へ一貼小兒十五才以下十才迄へ半貼十才以下へ半貼を二日に用ゆ尤も連日服用を禁忌へし

○疥癬

ペリウバルサム五匁を一日量とし毎日六回に塗附それハ大に其の効を奏す

硫化加里を水に溶し局處に塗るも効あり

氷二斗に硫黄花五十目の割合を以て硫黄溶を作り毎日六七回入溶し左の合劑を兼用するときハ大効を奏す

旃那一匁芒硝一匁大黄一匁

右を合して三包に分ち其の一包を水二合に入れ二合半より煎し其の煎汁を毎日服用をへし

○腫瘍を釀る法

緑青四匁黄蠟八十目麻油二百目
右三品を克く合して文火を以て煉合し目方一匁
を一貝となし患部に貼用すべし

○煩嘔

炭酸マグネシヤ五分程を冷水の一合程に溶し其
の中へ三分の酒石酸を加へ沸騰を待て喫飯をれ
と良効あり
重炭酸曹達五分を水一合に溶解せしめ其の中へ

酒石酸三分を入れ沸騰するものを服するも亦良
しとす
薄荷油の一滴を冷水に一合に加へ白砂糖を適宜
に混し服用するも妙なり

○癒瘡

黄柏八匁黄蠟八十目麻油二百目鬱金粉七匁
右四種を調合し文火を以て煉和し目方一匁を一
貝となし患部に貼すべし

○痃癖

樟腦二分をアルコール一合に溶し其の溶液を局處に塗擦すれば奇妙あり

火酒を塗るも亦良とす

○寒冒

接骨花　燈皮　藿香各三分カミツレ五分山梔子二分甘草二分

右を一貼となし沸湯二合に振出し一日に大人二

貼小兒一貼を用ゆ

カミツレ五分程に水一合半を入れ一合に煎し出し其の煎汁へ砂糖を加へ嚥下するも驗効大なりとす

砂糖湯に一滴の薄荷油を加へ喫飯し發汗するも其の効大あり

接骨木花四匁に水四十匁を入れ之を煎出し其の煎汁へミンデレリ精五分程を加へ尚其内へ砂糖

一匁を入れ一乃至二時間毎に四匁程ッゝ喫飯それば發汗すること極めて妙なりと云ふべし且つ其の味美なして其効も大なりとそ

ドーブルス散一分を氷或い温湯にて用ゆるも妙なりと雖とも臓藥なれと注意すへし

○癇症氣鬱

甘草　肉桂各一匁五分阿仙藥十二匁丁子六分竜脳二分麝香五厘

右六品を細末とし之を糊丸とし一粒の量五厘より丸し一回に二粒宛白湯を以て用ゆへし

○服鳴

平恒服鳴を患る人い可成的汁様の食物を食せざる様注意そへし

カルヤス泉四匁を冷氷にて頓服するも大なる効ありとす

リヤチ油の一匁を濃茶の中ゟ入れ飯用そるとき

也實効を奏す

多過の氷又は酒類を呑んで起る腹鳴あれば直に吐くを良とす

食物の滯溜にて起るときは重炭酸曹達三分位を冷水にて用ゐへし

○腹痛

鉛類を取扱ふ諸製造等の職工往々下腹又腹痛を覺ることあり然るときはリチヲ油四匁位を頓腹なし大抵十分時間程入溶し后靜ふ眠りに就くを良とす

甘硝石精の二三滴を氷の四匁程に混し喫飯するも良とす

温石を局處にあてゝ暖め兼て治藥をも用ゆるときわ其れ効速かり

吐氣あるものにハ鹽湯を與へて吐かしめるを良とす

縮酔にて腹痛を發そるものにわ極めて美酒を熱燗とし喫飲そべし

大黄末　蘆薈末　各五分を六十粒の糊丸とし一回に十五乃至二十粒を熱湯にて飯むべし殊に飯食停滞等より起るものに良とそ

麝香一分辰砂二分を混和し五包に分ち一包を水にて飯べ妙なりとそ

復方大黄丁幾八匁重炭酸曹達二分を水二十四匁に混和し内服そるも妙あり

神經性の腹痛には緬草丁幾と重炭酸曹達とを水に混和し用ゐれは効あり

○皸裂

豚の脂ま香水を混和し塗擦すれは其効尤も著明ありとそ

葛湯にリ[illegible]ンを和し局處に塗附するもよし

蜀葵根を水に煎出し局處を洗ふも妙あり

○吃逆

甘硝石精[illegible]二三滴を氷に加へ一杯の氷に加へ喫

下それは大効あり

○齲歯

歯牙に空洞あれはギュタペルヒヤと云ふ護母を

詰め或い金銀にて其の穴を塞ぐを良とす

毎食後柳樹の楊子にて歯牙を磨き食物の決して

歯の間に殘らぬよう注意そへし

○酸敗

平素度〻酸敗の起る人を可度的脂肪の多き魚類

を食せを淡薄な物のみ食をれと全く其の病の失

るものあり

大便の不利にて起るものあれは芒硝下劑或い大

黄下劑を服用すへし

炭酸マグヤレヤ三分程を氷一合にて嚥下するも

亦妙ありとす

○衄血

石炭酸或ハ濃酢酸を嗅吸するも良効あり

竜脳精にて鼻孔を再三再四洗條あすときハ全治するもけあり

明礬或ハ沿糖を水に溶解せしめ綿撒糸に漫し鼻孔へ詰置も妙あり

冷水を前額へ注き鼻孔を冷水にて數回洗條もるも亦妙ありとそ

○油耳

エーテルとアルコールとの混合液にて耳内を洗條もるを良とす

濃厚の石鹸溶液を水筒機にて耳内に注射し綿を鑷子に狭み克く拭うも至極妙あり

但し右水筒機並に鑷子との二器ハ藥店にある

を以て購ふへし

○呼嗅

丁子を煎じ其の汁に礦砂末を加へて含嗽をるを
良とす
明礬三分を水一合に溶解せしめ薄荷水の三滴程
を加へ之にて含嗽をるも妙あり
ザリシル酸を水に溶し之を以て含嗽するとき
至極妙あり
○癇子
コロール石灰に強醋酸を加へ塗附すれと功を奏

するものなり
硝酸或と鹽酸を貼するも効ありと雖も劇痛甚し
くして婦女子の如きい堪へかたし
○面皰
常素脂肪質を含有するもの或と澱粉類を含むて
と少あき食物を撰み食すへし
白降汞軟膏を貼り火酒にて洗ふを極て良とを
指頭にて押し出し石鹸液にて克く洗條するとき

バ速効あり

○眩暈

樹砂精を嗅かしめ安眠せしむるときい良効を奏するものあり

枸櫞油糖に葡萄酒を混和し喫飲せるも妙あり

○狐嗅

白粉を水に溶き塗擦くれば妙あり

安息香酸を末となし綿に擖布し紐にて腋下へ縛り置バ直に脱臭そるものあり

肉桂末に大黄末を混し之を糊に加し貼付そるも治そるものあり

○頭痛

若し大便の不利より頭痛そるときわ下劑を服用するを妙ありとそ

新鮮なる橙皮を二錢銅貨の大況さに切り之を顳顬部に貼付るを良とす

一杯の冷氷を飲み晴天なれば木の繁茂せる空氣の新しき庭園或と公園地の如き場處を散歩するを良とす

盡食後寢るべからず且つ深夜に酒食を喰ふへからず

毎朝頭痛を惱む人は毎朝濕潤しさる手拭にて顏と頭とを冷却し微湯温を以て口中を注き又浴後わフランネル或は紋羽等を以て脚部を卷き温むるを良とす

頭髮を清潔にかし散髮あれと短かく切り婦人みれと度ふ櫛を入るを良とす

婦人血の道にて起るものは靜に寢るを良とす

○齒痛

ケレチゾートを少許綿に漫し之を痛齒に附れと妙ありと雖とも劇藥なれと注意すへし

芒硝一匁程を一杯の氷に溶し服用するを良とす

但し妊娠時の婦人へ用ゆへからす

丁子或と菖蒲根を齒に嚙み居るも妙あり

○腸加答兒くたんりそら

サアレップ煎四十目鹽酸三滴單舍利別四匁

右を一日三度二日に分服すると妙なり

ドーブル丸散二分五厘タンニー酸コロンボエキス各一分白砂糖六分

右をよく混和し粉末とし五包に分ち毎時一包

づゝを用ゆへし但し臓藥あれゝ注意そへし

○腸胃加答兒　はきくだし

大黄浸五十目稀鹽酸二分五厘單舍利別四匁

右三品を克く混和し二時間毎に四匁ッゝ服用すれは良効を奏す

○脚氣

機那煎五十目醋酸加里一匁草舍利別四匁

右を三時間毎に四匁ッゝ内服するときは奇妙あ

りとも

鹽酸キニーネ一分五厘甘草末壹分

右三品を糊丸とおし一日三度二日に分服それは

良効を奏そ

硝酸加里一匁三分水四十八匁橙皮舍利別一匁六

分程

右三品を克く混合し一日三度二日に分ち飯むと

きは明あり

ザルチール酸曹達一匁水二十七匁單舍利別二匁

二分

右を混して一日三度に分服すれは至極妙なりと

す

○具物燕下一文銅錢を飯下

せし如きもの

鹽母漿二十六匁六分單舍利別二匁二分

右を一日三度三日ゟ分ち與ふれは至極奇妙あり

とす

○消化不良　ひねのそんじ

ジンチアナ浸五十三匁稀鹽酸二分五厘單舍利別

四匁

右を克く混和し毎日食時一時間程前ゑ八匁ッヽ

を服すれは妙あり

カルヽス泉四匁

右を一度に温湯を以て服用すれは妙あり

○腎炎

醋酸加里八分氷五十三匁單舍利別四匁

右三味を混和し二時間毎ゑ四匁ッヽ服用するを

良とす

ヂンコー酸一分

右の品を糊丸となし一日三度に分服すへし

○肋膜炎　むねいたを

粧松子二匁六分を氷五十三匁に漫出し之を布あ

て漉過し之に海藻エキス五厘と滿那舍利別の五

匁三分と加へ一時間毎に八匁ッゝを服用すれと
奇妙ありとす

ザルチール酸曹達一匁氷五十三匁單舍利別四匁
右を混和し一日三度二日ゟ分ち飲むへし

○關節僂麻質私　ふしぶしのいたみ

ザルチール酸一匁三分水四十匁橙皮舍利別四匁
右を克く混合振盪して二時間毎ゟ四匁ッゝを服
用すへし

ザルチール酸曹達二分五厘を朝夕服用するとき
と良とす

芥子油十滴テレビン油石鹼精各五匁三分
右の品を克く混和し振蕩して一日三度ッゝ局部
ゟ塗布するも亦妙なり

○筋肉僂麻質私　そじにくのいたむやまる

臭素加里二分五厘單舍利別二匁氷二十七匁
右を混和して一日三度に分ち飲むを良とす但し

戲藥なれど注意をへし

カルコス泉四匁

右を一度ゝ服用するも妙あり

ザルチール酸曹達五分水十六匁單舍利別二十一匁五分

以上三味を混合し一日三度に飲み尽すへし

○外痔核　いぼぢ

林檎酸鉄丁幾一匁三分重炭酸曹達八分水五十三匁單舍利別四匁

以上四味を混合し一日三度二日ゝ分ち用ゆるを良とす

里私林四匁

右の品を局部に塗附すべし

○膿瘡

臭素加里五分水二十六匁單舍利別二匁六分

右を一日三度二日に分ち用ゆ但し戲藥なれど注

意すべし

亞鉛華六厘甘草末八厘白砂糖六分

右三品を克く混和し六包とおして一日三包ッヽ

二日に用ゆ但し劇藥なるを注意そへし

○盈血症　ちれすくあきやまる

機鉄丸

右の丸藥を一丸ッヽ一日に三回用ゐるを尤も良

とす

○痔

リチヂ油

右の品を四匁ッヽ隔日に用ひ兼てヲレーフ油を

局部に塗附し和くべし

沃度ホルム軟膏

右の品を局部に塗り和らくも良とを然し劇藥あ

れは注意そへし

○急性氣管枝加答兒　がるさ

遠志根五匁三分を水五十三匁に浸出し之に海葱
葵舎利別五匁三分を加へ克く混合し一時間毎に
四匁ッゝを服用すへし
ドーブルス散二分五厘重炭酸曹達五分
以上二味を克く混攪し五包に分ち朝夕一包ッゝ
用ゆへし但し戯藥あれは注意すへし
○慢性氣管枝加答兒
遠志根二匁七分を水五十三匁に浸出し之に海葱

酢密一匁三分橙花舎利別五匁三分を加へ一時間
毎に四匁ッゝ用ゆれは良効を奏す
○便秘症
旃那葉五匁三分を水四十匁に浸出し舎利鹽八匁
覆盆子舎利別五匁三分を混し二時間毎に四匁ッ
ゝ服用すへし
○服膜炎　とげしきとらいたみ
杜松子二匁六分を水四十匁に浸出し之に海葱エ

キス五厘を加へ一時間毎に四匁ッヽを用ゆるとたゞ妙なりとす

○腦氷腫　とげしきをつう

沃度加里五分を氷二十七匁に溶ぜ覆盆子舍利別四匁を加ゆ克く攪拌し一時間毎に四匁ッヽを用ゆ但し劇藥なれは注意すへし

○白帶下

サビナ末　生姜末各一分硼砂二分五厘

以上三品を克く混し一日二度に分服すれは奇効ありとす

可溶鉄液

右の品を二十滴ッヽ一日三度に用ゆるも大に効なりとも

肝油

右の品を朝夕四匁ッヽ用ゆるを良しとす

○逆上

硝石五分二厘、氷二十六匁六分、單舍利別二匁二分
右三品を混和し一日三度に分け飲めバ大効あり
とも
氷蠶の中に氷を入れ額を冷却するも良とす
乳酸鉄一分三厘大黄エキス五厘乳糖一分三厘
右を調合して一日三度に分ち飲も亦奇妙あり

○條虫

石榴根皮一匁三分氷八十匁
右を二十四時間浸出し濾過してのち其の液の五十三匁を取り綿馬エキス五分三厘を加へ二度に分け用ゐれは妙あり
りナヂ油
右を四匁一時に頓服すべし

○併私的里

續草浸二十六匁六分杓藤油糖二匁二分
右二品を克く混和し二時間毎に四匁ッゝを用ゐ

る時は奇効を奏そ

ホルト酒十六匁水二十六匁六分單舍利別二匁一分

右を混合して一日三度に分ち飲むへし

○全身脂肪腫　こへふとるやまゐ

加爾々私泉目方二匁一分

右の品を朝夕頓服すれは効を顯そ

○神經病　さのややまゐ

聖鉄丸

右の丸藥を一日に三丸ッヽ用もれと妙なりとそ

○喘息

海葱丁幾二匁一分醋酸加里二匁一分單舍利別四匁水五十三匁

右の四種を克く混和し二時間毎に四匁ッヽを服用すれと大効を奏そ

○中風

機那煎五十三匁單舍利別四匁

右を一日三度に二日に分服すへし

○心季元進　ぜうき

ザリシヲ酸曹達五分三厘單舍利別四匁氷二十六匁六分

以上三種を調和して一日三度に分服すれと効ありとす

○脉血

收斂ニーテル四分護母漿二十六匁六分單舍利別二匁一分

右三品を調合して一日三度に分ち飲むべし

○麻疹

ドーブルス散一分三厘白砂糖五分四厘

右を分つて五包となし一日三度一包ッヽを服用するときわ奇妙奇りとす

○經血過多　めぐりのたくさんあるやまい

一半鹵化鉄液十五滴蛋白二個氷二十六匁六分
右三品を混和して一日三度に分ち飲ひへし
○脚部神經痛
樟腦丁幾八匁
右の品を臨臥塗擦て寐るを良とす
○經閉症
纈草浸五十三匁臭素加里一匁三分單舍利別四匁
以上三味を克く混合して二時間毎に四匁ッヽを

服用すれと奇妙ありとす
○舌咬傷
過滿淹酸加里五匁を氷百匁に溶き之を以て含嗽
するとたい良効を奏す
○加答兒性黄疸
カルゝス泉
右の品を四匁ッヽ氷を以て服用をへし
重炭酸曹達四匁氷製大黄丁幾一匁氷廿六匁六分

右三品を克く混和して一日三度に分服すへし

八十八

○加答兒性肺炎

機那煎二十六匁六分老列兒氷五分三厘單舍利別二匁一分

右を混和して二時間毎に四匁ッヽを服用をれと良効を奏するものなり

肝油

右の品を四匁ッヽ毎朝一度に服用をへし

○上肢筋僂麻質私

ザルチール酸曹達五分三厘をナプラートに包み毎朝一度ッヽ服用をれと妙あり

樟腦丁幾四匁

右の品を局部ゑ塗附すれと妙あり

○神經性胃加答兒

括矢亞五匁三分を水六十七匁に浸出し之を濾過して其の濾液を一日三度二日に分服すべし

八十九

○腦充血咽頭加答兒

燐酸リモナーデ五十三匁

右の品を二時間毎に四匁ッヽ服用せれは妙あり

とも

タンニー酸一匁を水百目に溶解せしめ之を以て

口中を洗條すへし

○肺勞

機那煎五十三匁單舍利別四匁ホルト酒四匁老列

兒水一匁

右の品を混和して二時間毎に四匁ッヽを服用す

るときは奇効を奏すると雖も劇藥なれは注意せ

るを良とす

○經血過多子宮內膜炎

收斂エーテル一匁單舍利別四匁蜀葵根煎五十三

匁

右は三品を混和して二時間毎に四匁ッヽを用ゆ

るときは大効を奏するものとす

ザルチール酸五分を水百五十匁に溶解せしめ子宮水筒機を以て克く子宮を洗條すへし

○精神疲勞

規鉄丸

右の丸藥を一日三度一丸ッヽ服用すれは妙あり

○下服

カミツレ浸五十三匁單舍利別四匁

以上二品を混合して一日三度二日ゟ服すれは妙ありとす

重炭酸曹達八分苦味丁幾五厘單舍利別四匁水五十三匁

以上四品を混合し二時間毎に四匁ッヽを服用するも又効驗ありとす

○蜂螫瘡

ポッタース或は石灰水少許を局部に塗附すれは

至極奇妙あり とも

○火傷

花粉を煉り局處に厚く塗り其の上を木綿或はフランネルにて包ゝをけは妙なり

○簽刺

甘草　經節

右の二品を克く粉末となし糊を以て混和し局部に塗附それは妙あり とも

○魚の目

蟹漬茄子を切り片きとなして魚の目を擦るへし

○斑雀を去る法

白茯苓を粉末とおし蜂密を以て之を溶き臨臥てれを塗り着け翌朝に至りて之を洗脫そべし

○霜燒

牡蠣を粉末となしぴん付油にて煉り塗付るときは奇妙あり とす

石炭油を塗附するときは奇効を奏するものあり

とす

○痛痛

大黄末八分　萆薢末五厘　蒲公英エキス八分

以上三品を以て五十丸とおし朝夕二丸ッヽ痛痛の起るときに服用すれは妙あり

○小便閉

沈香四匁　甘草二匁

右二品を水二合入れ煎煮して服用するときは効ありとす

ジギタリス葉二分五厘　テレビン油二分六厘　海葱エキス二分五厘　カミツレエキス適宜

右を五十丸に作り一日三度五丸ッヽ服用それは効を奏するものあり

○瘧

鹽酸キニーネ一分五厘

右の品を朝飯前二度に分ち服用それは妙あり

○止血藥

タンニー酸一分三厘明礬二分六厘薔薇水八匁

右三品を混して局部に塗るを良とす

○第一第二期火傷

阿列布油　石灰水各等分

右の品を混和して火傷に塗附するときは必ず奇効を奏するものありとす

○打撲

硼砂四匁芳香醋二十六匁五分カミツレ水二十六匁六分アルニカ丁幾四匁

右を混和して塗附すれは光も妙あり但し數回洗條する如く塗附して殆んと其局部の冷却する迄に至るを要す

○癩病

炭酸アンモニヤ二分六厘蜀葵根舍利別二十六匁

六分

以上二品を調合して毎日二回ッヽ用ゆへし

○頑癬

硫黄　大黄　明礬

右三味目方等分を取り各粉とおし醋にて煉和て之を塗附し二三日間湯水に附さる樣注意すれは極めて妙ありとす

ヂーア軟膏

右の品を塗附するも妙あり

テール　阿列布油各等分

以上二品を克く混和し之を局部に塗附するときは必ず良効を呈するものあり

○毒虫

黄蜂密蜂の類

若し右等の蜂に刺れたるときは石炭酸水を布の切につけ局部を厭へるときは疼痛去るに至る尚

二滴の石炭酸を水に加へ内服せしむれは妙あ
りとそ

○魚類の毒

海老　蟹　河豚　貝　鯨の類

中毒せしときは速に明礬末或は芥子粉を温湯に
加へ之を投し胃を一掃しヒマシ油を與へて下利
せしめ兼て酢と水を多く服用せしめ其の后阿片
丁幾の二三滴をエーテルに混し砂糖及水を和し

て多分に服用せしむへし

○菌毒

松菌　香蕈の類

若し中毒すれは速に吐酒石の如き吐劑を投ぜる
か又は羽毛にて咽喉を刺戟て吐逆を充分に起さ
しめ兼て舍利鹽下劑を多く與へて服中殘余の毒
物を一掃するを良とそ

○阿片並にモルヒネ類の中毒

強烈き吐劑假令は硫酸銅又ハ明礬或は芥子粉の如況ものを速に與へて可及的胃中の毒物を吐出せしめのち峻下劑を與るか又は濃厚の珈琲を服用せしめ患者を程よく運動せしめて兩肩及ひ頭部を冷却せしめ醫師來ちは胃唧筒を施し或はアトロピヲを皮下へ注射するあとあり

○水銀劑中毒

朱　白降汞　舛汞　赤降汞　水銀蒸氣

甘汞の類

牛乳、蛋白　小麥の粉

右れ三種を水を以て煉和て投與すれは効あり

○銅類の毒

綠青　丹礬　銅の器に貯へさる食物の類

燃性マグネシヤ　蛋白　牛乳　鉄粉　白砂糖

右等の品を多く服用せしむ但し酸類を決して用ゆべからさ

○砒石中毒

殺鼠劑　殺蠅紙　白砒石　鷄冠石

アニリン色素　石黄

吐根煎二十四匁芥子粉一匁五分

以上二味を混和し服用し吐出さし免兼て消毒藥

なる新製含水酸化鉄を投ずべし

○燐毒

最初硫酸銅を與へて毒物を吐出せしめ併せて芒

硝下劑を投與すべし

○礦酸中毒

硫酸　硝酸　鹽酸の類

炭酸マグネシヤ炭酸曹達　蛋白　牛乳　石鹼

氷

右等の品を服用せるを良とす但し硫酸中毒にわ

可及的氷を與ふるを減ずべし

○瓦斯毒

炭酸　硫化水素　石炭　コロール瓦私

の類

コロール中毒ゐは謹んでアンモニヤ瓦私を嗅入せしむべし其他の瓦私ゐは冷水を以て頭部を冷却し人工呼吸術を施用を良とす

○酒毒

燒酎　葡萄酒の類其の外コロゝホルム

酒類に中毒せしときは急に吐酒石又は皓礬の如き吐藥を與へ患者若し服用せざるときは胃喞筒を用ひて毒物を吐出せしめ頭部ゐは冷水を灌注して冷却をへし又時として鹽類下劑を用ゆることあり

萬病素人療治の心得　大尾

明治十七年七月廿六日版權免許
同　十八年七月出版
著者兼出板人　靜岡三番町寄留　壯合風子
定價拾八錢
東京馬喰町二丁目　嶋村利助
同銀座三丁目十四番地　昇榮堂
名古屋玉屋町　片野東四郎
靜岡江川町　廣瀨市藏
發兌書肆

各府縣賣捌書林

京都　村上勘兵衛　田中治兵衛

大坂　柳原喜兵衛　前川善兵衛

兎屋支店　此村彦七

東京　秩山堂　山中市兵衛

兎屋信　丸善書店

山中孝之助　東生龜次郎

嚴々堂　加藤正七

開進舍　須原屋茂平

蓮沼善兵衛　有隣堂

出雲寺萬次郎　石川治兵衛

松井忠兵衛　内田彌兵衛

博文舍　北島茂兵衛

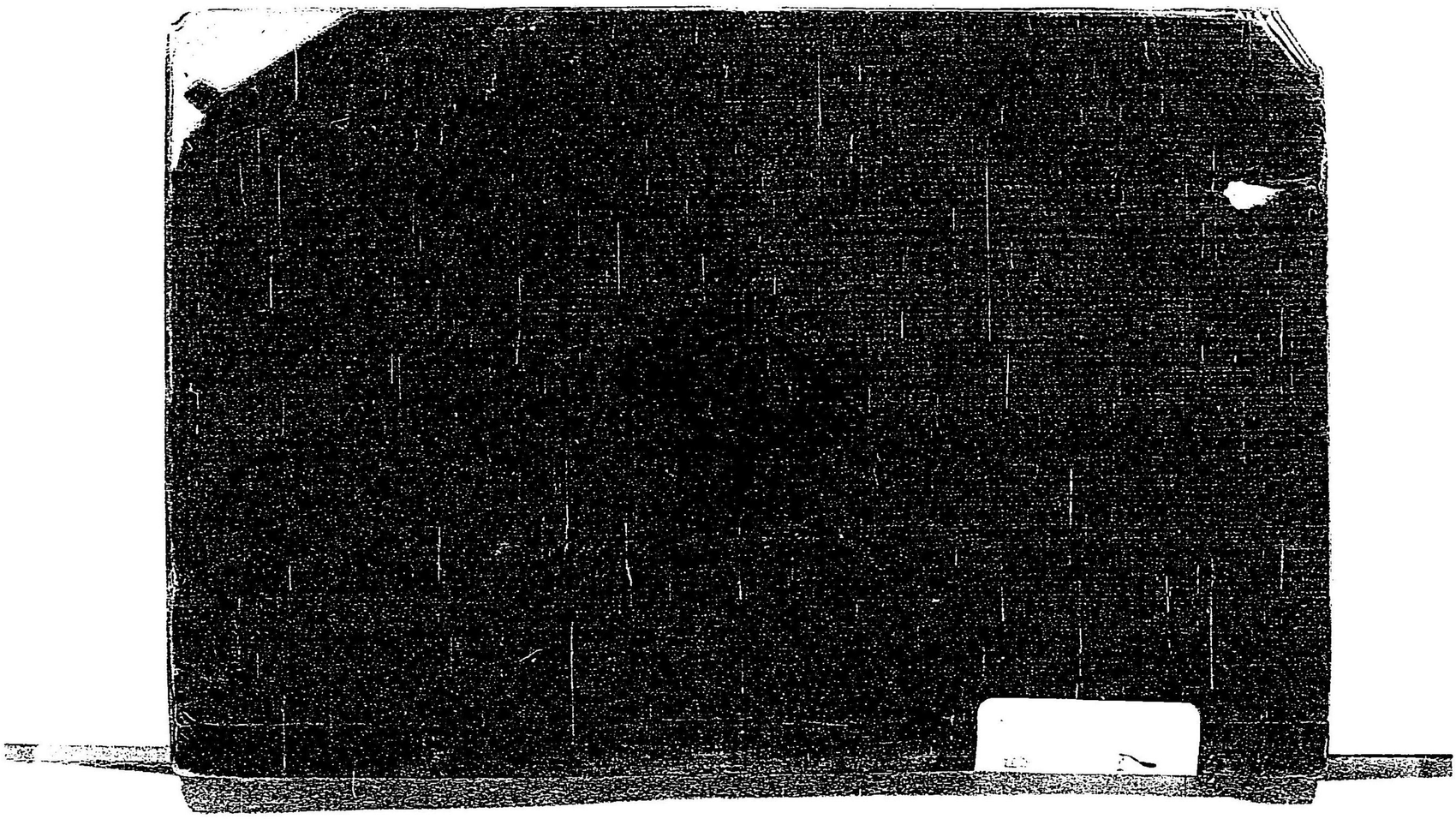
神戸　田中安助　熊ヶ谷幸助

岡崎

本屋文助　談月堂
大垣岡安慶助　平流軒
岐阜三浦屋源助　東崖堂
長崎以文會社　安中與兵衛
靜岡吉見義次　佐藤俊平
杉本平七　青木榮次郎
函館魁文舍　常野喜兵衛

百十四

印刷所　駿州靜岡兩替町三丁目壹番地　函右社



特65
417

特
4

058822-000-4

特65-417

療治の心得（万病素人）

壮合風子／著

M18
CBC-0393